

鵜野飛行場造成工事に行ったことと、戦時中の思い出

細見久雄さん（丹波篠山市在住 17 歳頃の話）

◎鵜野飛行場へ行くきっかけ

昭和 14 年（当時 12 歳）に、父親が逝去したことで、家庭の状況は厳しかった。近所には、この事情をよく知っている人物がいた。その人物は役場の兵事係にいたことから、我が家の事情を鑑み、「兵隊（召集）はどうにもならないが、徴用はこないようにする。その代わりに（鵜野の）造成工事に行ってくれ」と頼んできた。これが、私が鵜野飛行場へ行くきっかけであった。

◎篠山班の構成

村雲、畑など 3 ヲ村から構成された篠山班は 30 名だったと記憶している。どこからそういう指令が出ていたのかは知らないが、各村に割当があったのだと思う。自身は年齢が最も若く、他に集められた人は皆、親子ほど年が離れていた。

◎故郷から鵜野飛行場の宿舎までの道中

自身の暮らす集落からは 2 名が鵜野へ行った。篠山口駅から福知山線にのり、谷川駅で加古川線に乗り換えた。谷川駅での乗り換えに伴う待ち時間の際に昼を迎えたので、ホームで座って昼食をとった。その後、加古川線に乗り換えて粟生駅まで乗車し、目的である法華口駅まで乗り継いでいった。法華口駅では篠山あたりから来た人が集中していた。小雨が降るなか、皆、着替えなどの荷物を抱えたまま、どこへ行けばいいのか迷っていた。その時、班長（隊長。背の高い人であった）がいたのだが、道順くらい聞いておけばいいのに気が利かないのか、行くところが分からず下の者が困った。法華口駅から鵜野の宿舎までは 3 km ほどの距離があった（徒歩 40 分）。

◎宿舎でのようす（留守番をした日のこと）

一つの宿舎に 4 班が入った。何日かたったある日、「明日は留守番をするように」と言われた。留守番は、荷物の盗難防止の見張りであって、他にすることが無かった。留守番になった知らない者同士 4 人が箱火鉢の炭火に当たりながら雑談をしている、それだけが仕事だった。前夜に雪が降ったため、留守番当日の朝から雪かきの指令が出たが、それには参加せずにすんだ。夕方、帰ってきた人たちの地下足袋が濡れていた。夕食後、別のところで炭火を起こして乾かしていた。夜中、様子を覗きに行くときみなが火鉢で地下足袋を乾かしながら「大分に乾いたのう」と話していたので、それをしなくて済んで助かったと思った。

◎宿舎でのようす（一番つらかったこと）

自身だけでなく、皆そうであったが、食べるものが「豆かす飯」であったのが辛かった。

豆かすは、油を搾った大豆のカスで、実家ではそれを削って田んぼの肥料に撒いていた。肥料ほどのものではないのだろうけれど、そういったものが入っているのが豆かす飯であった。炊き立ての時はまだましだけれども、冷めた時には豆かすのにおいが臭く、また酸っぱい味がした。しかし他に食べるものがないので、食べなくてはならなかった。おかずは、湯飲み茶わんくらいの大きさの大根を輪切りにして炊いたものが2、3切れで、汁物は味噌汁ではなく、大根葉を使った、塩味の塩汁であった。食事の量はまあまああった。炊事場から食事が運ばれたら2、3人寄ってきて飯椀に飯を人数分よそい、終わったら声をかけてくれた。いじましい（意地汚い）話ではあるけれど、おなかが減るので、（よそっている様子を）見ないふりをしながら、一粒でも飯の盛のいいものを見ていて、それを狙っていった。実際には口で言うほど量に差は無いのだけれど、それはひがみ根性であったと思う。

◎宿舎でのようす（叱られ、笑われたこと）

夜に係の人が出てきて「集まれ」と言われるようなことはなかったが、2回ほど集合があった。その時に同じ宿舎の他の班の人に「また篠山班が叱られよる」と笑われていた。

◎宿舎の炊事係

鶺鴒野に行った日の夕方に「誰か一人、炊事に行くもんはおらんか」と声がかかった。一人の人が「ワシ行くわ」と言った。ほんじょう（丹波篠山市今田町本荘か）から一人、行った。その人は炊事のみで、他の作業には出ていない。各班から一人ずつ炊事係が出た。4班あったら4人となるが、もっと大勢いたと思う。

◎宿舎での演芸会の夜

鶺鴒野に来て何日か経った時に、演芸会をする、ということがあった。会場は自身のいた宿舎ではなく、別の宿舎へ見に行った。宿舎の棟数は知らない。演芸会は素人演芸でもなんでもやっていた。篠山班からも一人、顔見知りの人が出た。夜は寒いし、火鉢に5、6人あたらしたら（ほかの人は）寄れない。だから「おい、布団かぶって寝た方がましやでよ」と言って布団をかぶった。寝ていても隙間風が入ってくるので「まあ、今、豚やら牛のええところにおるで」と言った。

◎鶺鴒野へ持っていったもの

空の弁当箱を持って来いという話であった。朝食後、空になった飯椀に昼飯をよそってもらい、それを弁当箱に詰めなおして現場に持っていった。

◎現場でのようす（昼食時）

飛行場は周りに何も無い。囲いもないので寒い。ひとところで集まって昼食を食べるのだけれど、その時に草などをとってきて燃やした。完全には燃えないので、トロツコに塗る油

をかけて燃やしていた。トロッコに塗る油なのでそれほど減るはずもないけれど、油をかけて燃やしていることはトロッコレールの関所にいる人（監督員）は知っていた。自身は油を貰いに行ったことは無いけれど、「(油を) 抜いたんやろ！」と叱られていた。

休憩時間はあったが、最低 30 分ほど座っていたか。寒い吹き曝しに 1 時間もいられない。

◎現場でのようす（土運び）

加西の土は、根石が出てくるような土ではなかった。土ふるいをしたこともない。もっぱら、柄の長いツルハシで土を掘り、トロッコで土運びをしていた。トロッコに土を早く積んだ者からは急かされた。同じレールに複数のトロッコが乗っているの、皆が揃わなかったら押していけないからである。剣スコで土を掬うと、一杯でも割合多くの土がのるのでトロッコに早く積める。角スコだと、剣スコで掬うよりも楽な代わりに一杯あたりの量が少なく、スピードで負けてしまう。二人一組で運んだ距離はそこまで遠くなかった。作業はあまり辛いとは思わなかった。寒くても、仕事をしている（動いている）時は寒さは感じないので。

土運びに休憩は無かった。そして、1 日に 15 回運ばないといけなかったので、午前中に 8 回、午後に 7 回運んだ。

土運びは「もっと土盛れ」と言われた。（関所の）中から見ているのだと思う。途中にトロッコレールの具合の悪いところがあり、直せばいいのに（直してなかった）。それで押していたら、場合によっては脱線して、土がバサーッとこぼれてしまい、かさが下がった。すると「土が少ない」（と言われる）。トロッコが脱線すると皆で寄って上げた。中身が空になって帰る時、ちょっと（下りの）勾配があったので押しておいて、それにホイットに乗っていた。「前当たるぞ、前当たるぞ」と言っていたらドーン！と追突して。そんなことを「乗ったろけ」と言って、やっていた。

往復は、皆で固まって、2 列くらいに並んで、弁当箱を抱えて現場・宿舎間を行き戻りした。道具は現場に固めておいてあったので触らなかった。

◎現場に来た同郷の軍人のこと

トロッコの側面を開けて土を出していた時に、篠山の沢田という所の人物が「篠山から来てってんやったら懐かしい」と言って作業現場にやって来た。篠山が地元だからと言って知り合いがいるわけではないのだけれど、懐かしいといって来られた。長時間いたわけではなく、暇の時間を盗んで来られたのだと思う。一兵卒がそんな事を言って来られるとは思わない。篠山の立町の尊寶寺の坊さんも一人来られていて、ということを仰った。

◎朝鮮人労働者のこと

朝鮮の人が一人いた。その人とコンビでトロッコを運んだ。誰と作業しないといけない、という決まりはないけれど、偶然の組み合わせでそうなった。日本語は普通にしゃべっていた。日本に来て日本語を覚えたら朝鮮語の訛りが出るけれど、そういうことはあまり感じな

かった。自分よりもずっと年上で、30 歳くらいの年齢であったと思う。

◎飛行機に追いかけられたこと

作業に従事して何日か経ったある日、作業を終えて帰るときに飛行場の真ん中を通ってしまった。「おい、こんなところ通ったら叱られるぞ」と言っていたら案の定、叱られた。飛行機の上から「こらーっ！」と怒鳴られ、飛行機で追いかけられた。飛行機があれほど急旋回するとは知らなかった。自身たちは蜘蛛の子を散らすように格納庫に逃げたので助かったが、東の方へ逃げた人たちは飛行場の端まで追われたのだと思う。実際、自身たちが宿舎に帰りついた 30 分後くらいに、東側へ逃げた人たちは帰ってきた。班長が気を利かせて横を通らないからそんな目にあうのだと思った。

◎現場の位置

飛行場の真ん中ではなく、縁（滑走路東側周縁）の整備をしていたのではないと思う。土運びをしている時に練習機が離陸着陸するのが見えた。

◎就業時間・期間

朝は宿舎を 7 時くらいに出ていた。現場から宿舎までは 10 分か 15 分ほど、2 列縦隊で歩いた。現場に着き、8 時前になると格納庫から練習機 5 機が横一列に並べられ、エンジン始動して朝礼しているのが見えた。2 月の 17 時というので暗いので、作業時間は 4 時くらいまでだったかと思う。

鶺鴒野で作業をした期間は 10 日間だけど、おそらく 2 月 1 日ではなく 1 月 31 日に篠山を出たのだと思う。そうでなければ、中 8 日しか働かないという計算になるので。

◎川西航空機姫路製作所鶺鴒野工場のこと

夜中にエンジン調整のために物凄い音をさせていた。夜中 12 時ごろに目が開いた。昼も夜もなかった。

◎飛行機のアクシデントのこと

ある朝、格納庫の前に 5 機並んだ練習機の中の 1 機が、エンジン調整をして大きな唸り音をさせたかと思ったら、一気に逆立ちした。プロペラが地面について歪んでしまうので「ああ、あんなことになったらパイロットえらい目にあうぞ」と言い合った。このようなことは 1 回だけあった。

◎空襲警報と機銃陣地・練習機のように

空襲警報と警戒警報はサイレンが鳴るので分かった。また、土を運ぶ道中、すぐそばに機銃陣地が一つあった。警戒警報が出ない時は誰もいないけれど、警戒警報が出たらそこへ二

人、確か二人の兵隊が来て。空襲警報が来たら機銃が空を向いている、それははっきり分かった。警報の出ている間は、機銃陣地に兵隊がいた。

空襲警報が出たら飛行機が飛びあがった。はじめは「攻撃に行くのだ」と思っていたのだけれど、そうではなかった。練習機だから戦闘はできない。飛行場に飛行機を置いていたら敵機に狙われ、爆弾を落とされて機体が傷んでしまうからだった。皆、山陰の方にむけて空中退避して、警報が解除されたら戻ってきていた。

◎練習機の訓練風景

練習機は黄色かった。飛行場の真ん中に板囲いをして、指令、教官が双眼鏡で訓練状況を見ていた。ストーブを炊いて見ているのが見えた。戦時中は滑走路もコンクリートはなかったと思う。

◎鶉野からの帰路

宿舎を出る前に航空隊の、この作業の責任者から「どこどこを通ったらいかん」という注意を聞いた。けれども外が暗いものだから、どさくさ紛れに帰っていたら、通ってはいけないところを通っていたらしい。作業をしていたレールが敷かれていた所だったらしく、そこに引っかかって転ぶ人もいた。

法華口から粟生駅までたどり着いた後、加古川線に乗る待ち時間があった。蒸気機関車のレールの間には石炭ガラが落ちていた。石炭ガラはまだ熱く、そこを歩いたら温まるので、足を温めていたのを覚えている。篠山へ帰ってきたのは昼過ぎ頃か、割と早く帰ってきた。